

図1 会誌『赤ちゃん歯科ネットワーク』



『赤ちゃん歯科ネットワーク』創刊号



創刊号の目次

- 会誌発刊に際して
- 赤ちゃん歯科ネットワークでは会誌を発行
- 小児科医師として赤ちゃん歯科とのかかわり
- 「赤ちゃん歯科ネットワーク」の活動と意義
- 乳幼児の口腔保健
- 口の健康は生後1年が大きなカギを握っている
- お腹の中の環境（お母さんの体の実態）
- シリーズ座談会 第1回 吉田敦子先生に聞く
- 母乳育児について～おっぱい教室開講準備勉強会から
- 成人歯科からの振り返り
- 歯科医院における赤ちゃん歯科の実践
- 子育て世代をどう支えるか
- なぜ、今、日本に産後ケアが必要なのか
- 月子中心—台湾式産後ケアセンター
- 韓国の産後ケアセンター（産後調理院）について
- 男性歯科医師として赤ちゃん歯科に向かうということ
- 自己論文紹介
- 赤ちゃん歯科ネットワークの紹介

FOCUS

フォーカス

お腹の中から始める 口腔保健と発育支援

赤ちゃん歯科ネットワークが目指すもの



赤ちゃん歯科ネットワーク代表

石田房枝

(いしだ・ふさえ 石田歯科医院院長、
小児歯科医)

歯科医師を中心に発足した「赤ちゃん歯科ネットワーク」は、口の健康と全身の健全な発育が密接不可分であることに着目。歯科医の視点を取り入れた、0歳児からの発育支援のネットワークを広げ、研究と実践を重ねている。

インタビュー

私たち主に小児を診ている歯科医師は、2014（平成26）年に研究会「赤ちゃん歯科ネットワーク」を立ち上げ、その年に同名の会誌を創刊しました（図1）。この前段階として「赤ちゃんから学ぶ会」を6年間続けてきました。小児歯科を長年やっていても、赤ちゃんのことは何も習ってこなかった上、分からない、赤ちゃんを自分たちの目でよく見て、観察し、赤ちゃんから学んでいこうという思いで会の名称を「赤ちゃんから学ぶ会」としました。会を立ち上げるに際しては神戸パルモア病院の三宅廉先生の「小児科は赤ちゃんから診なければ本当のところがよく理解できない」というお言葉にも影響を受けました。

私たちは純粹に赤ちゃんから学びたいという思いで始めましたが、お母さんの中には「自分の子が教材として利用されるのではないか」との不安を持つ方もおられたため、会の名称を変更することになりました。その際、やはり歯科から発信していきたいということで、歯科という文言を入れました。そして、赤ちゃんから学んでいくには、歯科だけでなく保健師、助産師をはじめとするネットワークが必要だという認識の下、「赤ちゃん歯科ネットワーク」という名称に落ち着いたので。歯が専門の歯科がなぜ歯の無い赤ちゃんに関わりを持つのかと不思議に思われる方が多いことでしょうか。実はこの疑問は、一般の歯科医師が抱いていることでもあるのです。今では自治体による保育所歯科検診が行われるようになりましたが、歯が生えていない子を保育士さんが事前に除外していることもあり、歯科医師に診せても、歯だけしか診ないので、「未萌出」というだけで終わってしまうからです。

また、まれにですが、お母さんから小児歯科医院へ「まだ歯が生えてはいないので、口の中に白いものが見えるので、伺ってもいいですか？」と電話が入ることがあります。世の中の常識としては、歯科医院は、歯の問題で行くところであり、歯のない赤ちゃんはと歯医者との結び付きは全く異様に映るようです。

■ 歯科は歯だけが対象ではない

現在日本では、医科と歯科の教育体系は別々になっています。目や鼻は医科の分野ですが、口だけは医科から除かれているのです。

歯科といっても歯科Ⅱ歯ではありません。歯が生えてくる顎、口が専門領域です。歯がきちんと機能するために歯を支えている歯槽骨や歯周組織が同じくらい重要です。硬い物をかみ砕くには強い筋肉や腱が必要ですし、

「口の健康については、特に生後1年が非常に大きな鍵を握っている」
このことは私自身の50年にわたる小児歯科臨床の経験およびこれまで私たちが研究会を通して学んできたことと、まさに一致します。

しかし口だけを良くすることはできません。特に赤ちゃんの時代は、立ち上がるまでの体全体の発育が順序を追って左右対称に育っていくことが大切です。重力下で健康に生きていくためには、体を支える背骨、骨盤が左右対称にしっかりと育つことが重要であり、これが鼻呼吸、嚥下、咀嚼、咬合、歯周病、顎関節症などの問題と密接に関係してきます。

そのためには保健師、助産師、保育士など他職種との密接な連携が必要になってきます。ですから「赤ちゃん歯科ネットワーク」なのです。口という部位は、健康的な育ちがどのようであるかを具体的に、明確に示せるところ

それに耐える顎骨と顎関節も必要です。舌が適切に動かないと、咀嚼も嚥下もできません。口腔内の粘膜も角化していないと、硬い食片で傷だらけになってしまいます。そして食塊形成には潤沢な唾液分泌も必要です。口の中に出てくる唾液の性状や量は、歯への影響も大きいので、唾液は歯科医学の大切なテーマでもあります。また口は硬組織である歯や顎だけでできているのではなく、舌をはじめとする軟組織が大部分を占めています。

顔を正面から見れば、半分は顎でできています。顎には上顎と下顎があり、口を構成していますので、口の使い方では顔の形が左右されます。口を閉じて鼻で呼吸ができない子は、長い顔になりやすいのです。咀嚼の仕方でも変わってきます。顎骨の形態は、頭蓋骨基底部の形態とも関連し合っています。顎関節は体の中の一番上にある関節で、平衡感覚をつかさどる最後の砦

なので、他職種にも歯科からの適切な情報がきつと役に立つものになるだろうと思います。

■ 頭部形態を整える

赤ちゃんの頭の形は、丸く育つのが良いのです。頭の骨の中には脳が入っています。頭の変形があると、当然脳の形にも影響し、歪として脳圧に影響を及ぼすこともあります。

歯列弓は頭の形とおおよそ相似形です。一般的にCaucasianは長頭型、Mongoloidは過短頭型です。歯列弓も似たような形態をしているので、Caucasianのために開発された歯列矯正文法が、日本人では効果がなかなか表れないということもあります³⁾。このように頭部形態は、歯科としても重要な問題です。

最近斜頭が増えてきます。向き癖がなかなか直らなくて3カ月も過ぎる

でもあります。

■ 口の健康は生後1年が鍵を握る

口は赤ちゃんがお腹にできたときに、最も早く作られる器官です。単細胞生物から、多細胞生物になり、器官ができてきますが、腸管は、脳や心臓より先にできるところです。口というのはその腸管の入り口、出口に当たるところなので、最も先にできる器官であり、先にできるものは、後からできるものに影響を与え、命の根源に関わる機能をつかさどっているのです。

皆さんにぜひ知っておいてほしいことは、赤ちゃんにとって、お腹の中の影響がいかにか大きいか、そして歯科領域の疾病は、赤ちゃんが歩き出す前の育ちが大きな鍵を握っているということです。井上らは17年に及ぶ沖縄での疫学調査の結果²⁾、以下のような結論を導き出しました。

と、頭の変形も簡単には直りにくくなります。首が据わってからヘルメットを利用して変形を改善するという治療法もありますが、赤ちゃんにとってはあまり楽な処置ではなさそうです。23時間、数カ月間装着していなければなりません。その犠牲を払っても変形を改善することは大切かもしれませんが、そうならないように、以下のように早期に対応してあげたいものです。

▼まず首肩の凝りのチェックです。凝りがあれば反対向きの姿勢は取りにくく、歪んでいきますので、早めに取ってあげて、向き癖が付かない寝かせ方をします⁴⁾。

▼1カ月過ぎたら、必ず監視下で、少しずつ腹這い姿勢で過ごせるように遊んであげましょう。全く腹這いをさせずに3カ月以上たってしまった子も見かけますが、体重が増えてくるとますます腹這いが難しくなりま

大切です。

▼まあるくなれ、まあるくなれ、と優しくなげてあげるのも効果があります。骨が柔らかいうちは、お母さんの優しい掌は威力を発揮します⁵⁾。斜頭は髪の毛が伸びてくれば分らないから放っておいてもよい、というものではありません。

頭を落として抱くことの悪影響

赤ちゃんが小さいうちは特に抱き方の影響は大きいものです。最近多くの場面で、赤ちゃんの頭を落とした抱き方をしている光景に出合います(図2)。赤ちゃんの頭は重いので、頭を後ろに落とすと首の前面から上胸部、後頭関節に負担がかかります。そのあたりの筋肉や神経は哺乳行動に必要なもので、口が開きにくい、舌が動きにくい、嚥下しにくくすぐにむせる、ゼロゼロというような症状が表れてくるの

図2 頭を後ろに倒して抱かれている赤ちゃん



で、菌科的にも大変重大な問題です。特に舌骨は、哺乳行動(吸啜、嚥下、呼吸)の要ですから、首をのけぞらせて舌骨に付着する筋肉を緊張させることは大きな悪影響があります。また縦抱っこは、頭頸部や背骨で重力をもろに受けまから、体を丸くし

た横抱っこが望ましいと思います。しかし最近では横抱きを嫌がり縦抱きなら落ち着く子が多いようです。その方が赤ちゃんにとって快なのでしょう。縦抱きになると、首も背骨もふにやふにやで体幹支持力がない赤ちゃんが、重力をもろに弱いところで受け

る形になり、続けて縦にしていると赤ちゃんは耐えようと頑張り、ますます硬くなってしまいます。

頭の重さが脊柱だけにかからず分散できる横抱きの方が赤ちゃんの身体には優しい抱き方なのです⁴⁾。本来ならこの抱き方を好むはずなのに嫌がるのは、体のどこか、首、背中などが凝っているためですから、見つけてほぐしてあげると横にもできるようになります。お母さんの優しい手をそっと凝っている部分に当てて温めてあげるとだんだんほぐれてきます。入浴時も効果的です。優しく動かす赤ちゃん体操もいいですね。

柔軟な体の赤ちゃんは表情も穏やかです。薬におっぱいが飲めますから、お母さんも楽です。このようにならよとしたアドバイスが、将来にわたって大きな力になるのです。特に生まれて3カ月は顎の発育も旺盛な時期です⁶⁾。

うまく飲めない子は、うまく食べられない?

どのような固形物でも、最後は飲みこまなければ体の中に入っていないまさん。保育園や小学校で食べるのに時間がかかって困る子は、かめない子というより、かんでも飲みこめない子が多く、100%液体なら飲めても、それ以外の少しでもざらついたものは飲みこみにくいのです。

また、固形物を自分の飲みこめる大きさまで小さくできなかつたり、アグアグしてどのくらいで飲みこめるのかという練習が不足していたりします。通常これは慣れれば無意識でやっていることなのですが、無意識で飲みこめるようになるまでの練習ができていないので、気になって飲みこめません。

乳のような100%液体嚥下の練習は哺乳期で済みます。ですから、乳の飲みが悪いから離乳食を早めるというのは

間違った考え方で、むしろ離乳食を始めるときには、乳の飲み方がうまくなっている必要があります。

離乳期(固形食移行期)につける力

私たちは食べ物が口に入ってくると本能的にすぐ飲みこもうとします。しかし、①そのままでは飲みこめないと分かれば口を動かして、飲みこめる形態に落としていき、嚥下します。離乳期はまた、②液体(唾液)の中に少しずつ固形物が入って一緒に飲みこむ、すなわち形のあるものを飲みこむという、主に二つの練習をする時期です。これが上手になれば錠剤やカプセルでも飲みこむことができます。大人はこうした力を養ってきています。

ですから赤ちゃんがもぐもぐして、便に人参の塊が出てきたら、それは「丸飲みこみした、大変だ」と大騒ぎすることではなく、「おめでとう」なのです。

これまで100%液体しか飲めなかつた子が、このサイズまでつかえずに飲みこめて、うまく腸管を通過させることができたのですから、素晴らしい進歩です。子どもの機嫌を見ながら様子を見守ってあげば、だんだん消化力が高まっていく経過が観察できます。

①固形物を口の中で小さくする練習

これはまず、アゲアゲしても形が崩れて飲みこんでしまう心配のない物で練習するのがよいと思います(図3)。菌固めもよいのですが、食べ物なら、味を覚えますし、食欲を刺激するので唾液も良く出ます。昔は昆布や干しダコなどで、自由に気の済むまでガチガチしゃぶらせてもらえました。このとき唾液がたくさん出ますが、徐々に垂れ流すだけではなく飲みこむこ

図3 ガチガチは口を動かし唾液を出させて飲みこむ嚙下の練習(乳首をくわえなくても飲みこむ練習)



とも覚えていきます。

これまでは乳首をくわえることにより自動的に、下顎を固定してごっくんしていたのですが、くわえるものがないくてもごっくんできる良い練習にもなります。ただ飲みこむだけの練習から始める離乳初期食と違って、この方法は自分で口腔周囲筋をしっかり動かし

て出てきた唾液を飲む練習になります。菌の無い菌肉も鍛えられます。また、自分で手に持ってやりますから、自分の意志で好きなだけ、好きなように動かす練習になります。ここは大切なポイントです。親からただ与えられる受け身の練習ではないので、スプーンで放り込まれて与えられる離乳食よ

りよほど意欲を高めることができま

す。
子どもの様子を見ながら、徐々に与える物の柔らかさなどを加減していけば、離乳初期食は不要になり、家族の食べ物の中から選んで与える、大変手のかからない離乳食になります。実は昔はそうでした。今は親が一生懸命手をかけ、子どもの手を押さえて意欲を失わせ、揚げ句の果てに「食べてくれない」と悩む結果になっています。全国のひとつの離乳食教室での悩みは「食べてくれない」がダントツに多いのです。

②形のあるものを唾液と一緒に飲みこむ

これは食欲によって導かれるのではないのでしょうか。食べたい本能が、この力を養ってくれるのだと思います。おなかですいてアゲアゲしていくことを繰り返していくうちに自然に身に付

いていくのでしょうか。また心理的な影響も大きいので、一緒においしそうに食べている人を見て覚えていくようです。一人で食べさせられているのでは身に付きにくいでしょう。

離乳食開始時期

以上のような理由から私たちは離乳食の開始時期として次の3条件を大切に考えています。

第1の条件は「離乳食を始める前に100%液体の乳を、乳房をくわえて上手に飲む力がついている」ことです。お腹がすいて飲み始めたなら、一気に飲み終わり、満足し、次まで十分時間が空くこと。つまり、だらだら飲みではないことです。哺乳期にこの生活リズムがついているのはとても大切だと思います。固形物を食べ始めるには、これまでの乳だけを飲むことのほかに、新しい動きである形のあるもの

を飲みこむこと、そして口を動かして飲みこめる形態を作っていく動きを学習していかなければなりません。

この新しい活動の原動力は、空腹感です。おなかですいて食べたいという本能が、新しい動きを学習するチャレンジ精神を引き起こします。空腹感のない子に離乳初期食を流し込むのでは、親子とも喜びはありません。おなかですいた……もらってうれいという喜びがあれば進みやすいと思いませんか？ 子どものうれいそうな顔が、親への何よりのプレゼントです。

第2の条件は、「お座りが自分からできる」ことです。これは上半身を重力に負わずに保持する力がついているということなので、口が動かしやすくなり、誤嚥の心配が少なくなります。次の動作にも自分で移ることができず。ところがお座りの練習を早くからさせてしまうと、重力を支えられない状態です。頑張るので体が硬くなります。

図4のように突っ張った状態では食べも飲みもできません。楽に飲みこんだり、口を動かしたりするには、体が柔らかくなければやりにくいのです。寝違えたときは大人でも食べにくいものです。向き癖の強いお子さんは、常時寝違えたような状態ですから食べにくいわけです。優しく撫でてほぐしてあげましょう(図5)。

第3の条件は「子どもが食べたそうにする」(よだれ、手が出る)ことです。

図4 このように突っ張ってはいは食べられない



おなががすいて食べたい意欲の表れです。親兄弟のおいしそうに食べる姿は自分も同じようにしたいという意欲を刺激することでしょう。

離乳開始時期や進み方の個人差は、それまでどのように育てられてきたかにより大きく違いが出てきます。

■ 口腔模型から分かること⁶⁾

私は数年前、妊婦教室や離乳食教室

図5 体が緩めば食べられる



などを通じて20年以上にもわたりお世話になってきた、庄司産婦人科小児科医院小児科の庄司慶子先生のご好意で、生れたばかりの赤ちゃんのお口の模型をとらせていただきました。入院中とその後1カ月以上の間隔で、継続して模型をとらせていただき、成長変化を追うため三次元計測をしてその12形質を解析し研究しています。

それにより分かったことは、赤ちゃんの口蓋は、生後3カ月くらいまでは

大きく変化し、その後は変化が乏しいということ。顎の外回りの幅などの大きさは月齢とともに大きくなり、また生まれたとき大きかった子は、以後も大きいという相関が見られますが、顎の内側の部分、口蓋は、生後3カ月ぐらいまでは月齢に伴い大きく変化し、その後はあまり変化しません。口蓋部分は顎の形態を決めるところで、そしてこの部分が、将来の顎の発育の善しあしに影響を与えるところなのです。

妊娠中から首が据わるころまでの育ちが、影響力が大きく大切などであることをぜひお伝えしたいと思えます。

■ 左右対称に育てると口腔機能

顎の関節は、約250個の関節の中で一番上にあり、両側性の可動関節という特徴があります¹⁾。関節円板を持

ち、前後左右、上下の三方向の運動ができ、左右合わせると8つの筋が任意の組み合わせで動きます。ですから非対称の影響も受けやすいといえます。体の非対称がひどくなると、顎関節の慢性炎症の急性化、慢性疼痛、開口障害、摂食障害などの症状を起こしてきます。つまり口は、体が対称的に動くときに問題なくよく機能できるので

骨盤や脊柱が左右対称に使われることが、その上に位置している口にも影響を与えます。完璧な左右の対称性を確立している人は見られませんが、一定の閾値を越えた非対称は疾患を誘発することが懸念されます。成長期の非対称は、筋緊張などから成長する部位に応力が集中し、圧力が加わった状態では成長が抑制されることも考えられます⁸⁾。子どもが育っていくときに左右対称的に体を使う訓練はとても大切なことです。

口がしっかりと機能することを発育の観点から具体的に考えて、以下のような注意喚起をしたいと思います。

▼寝かせ方は向き癖なく育てる

これにより体のコリを早く取って柔らかい体にします。

▼寝返りは左右両方とも同じようにごころご自由にする

片方だけでできればよいと思っている親が多くいます。このころからすでに左右差がはつきり出ていることが多いので注意したい項目です。作業側もバランス側も楽に動かせることが将来にわたって大切です。

▼四つ這いをしっかりとさせて育てる

四つ這い姿勢は特に非対称がはつきり見える時期です。手足の対称的な動きができるように、思う存分這い這いをやらせたいものです。

▼つかまり立ちして早く歩きださないように注意

仙骨座りや、いざりのまま歩きださ

癖をつけないよう注意が必要です。

■ 超低出生体重児の顎のキヤッチアップグロースは難しい

超低出生体重児でも、1歳（修正10カ月）でほぼ大人と同じものが食べられるようになることは可能です。また四つ這いをしっかりと、体幹を立派に育てることも可能です。しかしそれでも、2カ月ぐらいチューブ栄養で育ったら、歯科の介入を何もせず顎発育を良くすることは難しいです。舌のスペースのない狭い口蓋は、年齢が上がっても自然に広がることはありません。

満期産で生まれることができるようにすることが、最大の予防法です。妊娠中の生活の指導をぜひ専門の方々にお願いしたいです。

最近NICUにおいてデイベロツプメンタルケア（DC）を受けた子

が育ってきていますが、DCはNICUからコット移床したり、その後も同じような配慮でケアされたりしない、効果は上がりにくいのではないのでしょうか。私たち歯科医はまだNICUのDCメンバーとして入ってはいませんが、研究を進めて何か役立つ仕事ができたらと願っております。

■ 歯ブラシ以前に大切なこと

歯科の予防というと、よく歯磨きといわれます。しかし口腔を健全に保つためには虫歯や歯周病の予防だけでは十分ではありません。押さえつけてでも歯磨きをしつかりやればよいというものではないのです。特に3歳以前の乳幼児は、お口の健康を守るためには歯ブラシ以前に大切なことがあります。

▼口を正しく使う

正しい食べ方をすること。食べ物を

とるときは、あむ！として口を閉じま
す。食べ物が口の中に入っている間は
口唇を閉じてもぐもぐします。ごっく
んと飲むときも口を閉じてします。よ
くしゃべりながら食べている子を見か
けますが、口を閉じなければ咀嚼の動
きであるすりつぶし運動はできませ
ん。

口を正しく使うためには、口を閉じ
て鼻で息ができることが絶対必要な条
件です。これは顎を正しく育てる根本
でもあります。最近では、鼻炎のほか
に、気道が狭いために鼻呼吸ができな
い構造上の問題を持つ子も少なくあり
ません。

▼水を飲みながら食べない

レストランへ行くと真っ先に水が出
されます。幼稚園・保育所でも食事の
前に水が配られます。学校給食では牛
乳です。口に入れた食べ物を牛乳で流
しこむ子も見られます。食事中に水を
飲むと、食べ物をあまり噛まずに流し

こみをしてしまうだけでなく、唾液の
分泌も妨げられます。発育期の子ども
は、唾液腺も成長中ですから、唾液腺
が十分育つよう唾液を出す機会を多く
つくるのが大切です。唾液の出が良
い子は食後も口の中はあまり汚れませ
ん。

▼飲み物の注意（水以外の飲み物は食
欲に影響し、むしろ歯にもなりやすい）

子どもの飲み物は、水かお茶だけと
割り切り、清涼飲料水などを飲む癖を
つけないことはとても大切です。脱水
症を起こしそうなときに電解質飲料な
ど勧められたときは、そのときだけと
捉えて、それをきつかけにたびたび飲
む癖をつけないことです。砂糖無しの
飲料でも、ほとんどが酸性ですから、
たびたびの飲用により酸蝕症を起こし
やすく、歯も溶けてしまいます。

▼だらだら食べない

飲食回数は口の健康に与える影響が
大きいです。通常口の中（唾液）は中

性です。食べたり飲んだりすると酸性
に傾きますが、しばらくすると唾液の
働きで中性に戻ります。しかし飲食回
数が頻繁になると唾液の自浄作用が追
いつかず、口の中は汚れやすくなり細
菌叢も変わってきます。体を使って空
腹で食べれば唾液もよく出ます。食欲
があり味覚を充分に育てておくことも
唾液をたくさん出させる効果がありま
す。

▼汚れにくい物を食べる（特に最後）

何をどのように食べるかも大切に
す。繊維の多いものは、かむことによ
り歯面、歯肉もマッサージされ、唾液
腺も刺激され汚れにくくなります。逆
に、餡など長い時間口の中に入ってい
る甘い物、柔らかくべたつく食べ物は
歯を汚します。

▼唾液分泌を抑制する薬物に注意

ほとんどの薬は、唾液の分泌を抑え
る働きがありますから、口は汚れやす
くなります。

歯磨き行為から 学べること

3歳前の子の歯磨きは、触られることに慣らすのが一番の目的です。なぜなら口の中はとても敏感な場所だからです。私たちは「一番初めの歯ブラシはお母さんの指」と言っています。いきなり歯ブラシではなく、受け入れられやすい指で慣らしていくのです。体の中でも顔は敏感ですが口はもっと敏感です。下唇より上唇の方がずっと敏感です。口の中はもっと敏感なのです。また、下より上が敏感なので、下の歯は磨かせても、上を磨こうとすると嫌がるという経験をされた方もいるでしょう(図6)。

鈍感なところから徐々に指で慣らしていきます。指で慣れたら歯ブラシです。上の前歯がすっかりそろったところ、歯ブラシで簡単にささつと磨かせてくれるようになればいいですね。3歳前

の子の歯磨きが上手に楽しくできるお母さんは子育て上手だなと思います。

口を守ることは 人間らしさを守ることに Well-being

歯科は疾病の治療を行っています。特に小児歯科ではその後の定期健診が主になっています。目指すところはWell-beingです。健常児を継続してみていかれるところは他にあまりないのではないのでしょうか。

健康な育ちとは、どのようなものでしょうか。昨今の環境変化はあまりにも激しく、子どもの発育にもさまざまな影響が出てきています。左右差の問題も、利き手のような微細運動の段階ではなく、寝返りなど粗大運動のレベルで、すでにはつきり左右差が出てきている現状は無視できません。顎関節は、姿勢の崩れを守る最後の砦ですから、歯科は姿勢の番人でもあります。

図6 初めての歯磨きは、まずお母さんの指で



下を触っても嫌がらない



上は敏感、慣れてからやさしく

保健師さんの仕事は「病氣予防や健康の保持・増進のためにさまざまな保健活動を行う」と伺っています。同じ目的で働いている者同士ネットワークを組んで活動できたらと願っています。

参考文献

- 1) 田畑純編著. 口腔の発生と組織改訂3版. 南山堂, 2015
- 2) 坂下玲子他. 宮古島の子どもたち—そしゃく器官の発達のために—. 口腔保健研究会事務局, 2003
- 3) 三谷寧. 歯科診療の現場で求められる“気づき” 気道が訴える. 小児歯科臨床, 2012
- 4) 吉田敦子, 杉上貴子. おなかにいるときからはじめるべびいケア. 合同出版, 2012
- 5) 吉田邦夫. 手を添えるだけで、骨のゆがみがなおる! PHP研究所, 2010
- 6) 石田房枝. 無歯期乳児における口蓋形態の成長発育. 顎顔面口腔育成会誌, 2015, vol.3, no.1, p15-21
- 7) 石田房枝. 食べられる口作り—姿勢の観点から考える—. 小児歯科臨床, 2015, vol.20, no.5, p27-35
- 8) 清水正裕. 身体の非対称をもたすメカニズムについて. 顎顔面口腔育成会誌, 2015, vol.3, no.1, p101-103
- 9) 藤本智久, 石本麻衣子, 上村裕保他. 新生児のリハビリテーション. 姫路赤十字病院誌, 2013, vol.37, p22-33

【赤ちゃん歯科ネットワーク代表者】
石田歯科医院 石田房枝

【事務局】
〒300-0814 茨城県土浦市国分町 4-15 たかぎ歯科
FAX : 029-822-3114
E-mail : babydnet@gmail.com
ホームページ : <http://babydnet.kenkyukai.jp/about/>